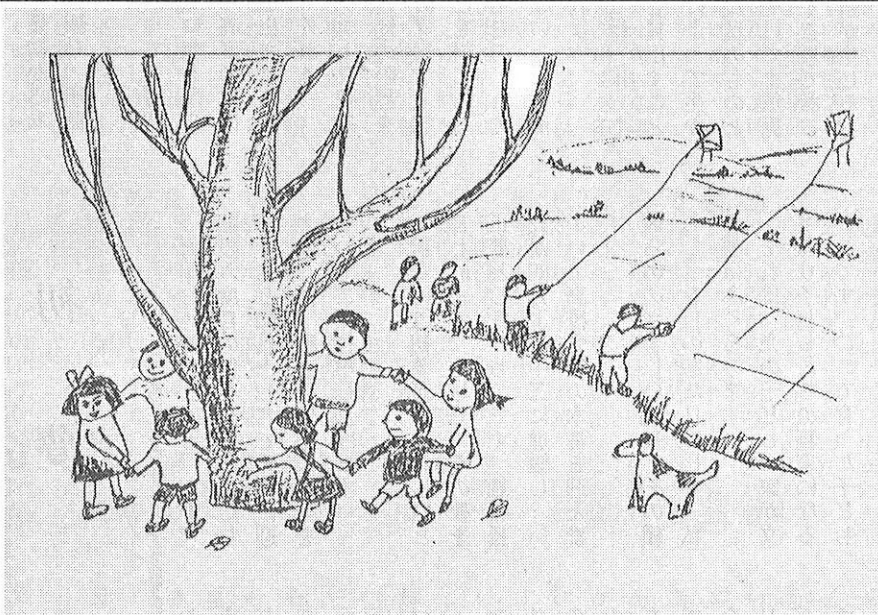


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京3-128022
 印刷／(株)ドモン企画

謹賀新年

社会福祉法人
 養護施設
 光の子どもの家



新しくなった(コリント人への第二の手紙第五章第十八節)

理事長 福島 勲

聖書の学びは一面、過去の人々の信仰のあとを訪ねることであり、ここでなされた神の業を見、ここで語られる神の声を聞き、他面、これらを踏まえて未来に向かって開かれた神の恵みを信じることである。

故事を学ぶことは好事家の楽しみに終わるようなものだけでなく、新しいものへの進展を望むことである。古書の世界に踏み入って、地の快楽を得るように、旅の世界もこれに類するものがある。

昨年は一千万人が海外に赴き、新年の休暇では五十万人の人々が出かけたといわれる。国内はもちろん更に多くの人の移動があった。旅には、仕事のため、また未知の世界に異なる文化に触れ、自然の生成、人間の営み、美術芸術歴史のあとを探り求める。

日頃の憂さを晴らし魂の休養、再会の喜びなど、さまざまな目的があるだろう。

モンテーニユは、風雅の旅でなく人生観照の旅と言っており、中村元氏は芭蕉の旅は宇宙を実感することであり、更に言えば現象界における絶対者の把握だといっている。

聖書の中のパウロの旅は、不便と困難の中で地中海の周辺をめぐる三度の大旅行であって、なお、地の果てにまでも赴こうとしているが、その目的は自明である。森本哲朗「神の旅人」では、「洋の東西を問わず、偉大な宗教家が旅にその生涯を賭けたことが、旅の本質を何よりも雄弁に語っている。旅の形はさまざまな変化を遂げたが、その原点は疑うべくもない。

旅とは神の呼び声に応じること、何かを求めてひたすら未知をたどること、何かを証そうと一歩一歩足を踏みしめることに外ならない。」と言っている。人生は言うまでもなく旅である。前途に向かってたゆみなき営みを抱いて歩み続けている。

初夢

施設長 今関 公雄

安全なレールなど最初からあるはずがない。踏み誤り、呟語を来す。
不安と隣同士であって、青空を仰いで明日の天気配を配らねばならない。精巧高度の技術と機械によって導き出される天気予報も往々にして外れる。
オウラス・アルファを読み取れない。ここに人知の限界を知る。と同時に神のプラス・アルファのあることを信じてとき、人生の歩みの中の恐れ故に、ことを行わないという消極性は、打ち消されよう。

新年おめでとうございます。開設六度目の新春を子どもたち三十名と職員十七名で元気に迎えました。読者の皆様に感謝をもつてご報告申し上げます。

もつとも彼らの背後には多くの支援者が必要であります。私などは老年で折り専門の支援者になつていられるでしょうか。ともかく彼らの活躍を確認するためには、人生百年を目標に頑張るつもりです。

族治療所というわけにはいきません。施設は文字通り子どもたちの「第二の実家」になります。慣れ親しんだ光の子どもの家を、第二の我家とした子どもたち自身が、後輩のために親身の施設経営、運営に当たるのです。家庭養育困難となり親や家族と一緒に暮らせない重荷を持った者同士として、その重荷を共有し、先輩、後輩として世代継承をするのです。しかもこのことが、幾世代も連綿として続けられます。

新しいということは、古いものの中に神の真実を見出すことである。キリストによって生かされた人々の体験が私のものとなることである。そしてまだ見ぬものをまこととする事である。ここで希望と忍耐が生じる。

新春には初夢がふさわしいと言われます。そして、その夢を正夢としたいものです。最年長児が四月より中三に進級し、いよいよ高校受験の本番を迎えます。

養護施設は、家庭養育困難となり、親や家族と一緒に生活できなくなつた子どもたちのための八家Vなのです。たしかに、入所にいたる家族内葛藤や困窮を見ると、その家は緊急避難所であり、混乱の渦中から安全、安定な生活拠点が必要であり、施設には衣食住の保障を中心に家庭代替機能が求められます。

以上が私の初夢です。これが正夢となるように神様に祈り続けていくつもりです。そのためにも光の子どもの家が神の家族としての一体感を大切にすることを祈ります。

この無力にして虚弱なものが、神の恵み、キリストの栄を示すことへの細かいが、力いっぱい努力を促される。

それは、光の子どもの家が文字通り子どもたちの我家になることです。ここで育つた子どもたちが成人して立派な社会人となり、施設の担い手になることです。自分たちの家であることを、自分たちの手で運営や経営に当たる者が育つてほしいと願っているのです。

また、施設が親との関わりを大切にして、家庭調整や家族治療に努め、子ども家庭引き取りなど家庭再回復への取り組みを為す治療機能も重要です。しかし、親の事情が複雑で困難な場合があります。すると施設は先のように緊急避難所や家

「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとつて下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去つたからである。」
(ヨハネ黙示録)

新しい年が、こうした新しさと満たされ、前進する年でありたい。

職員や役員の大半を彼らが占めるようになって欲しいのです。

職員や役員の大半を彼らが占めるようになって欲しいのです。

「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとつて下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去つたからである。」
(ヨハネ黙示録)

父の戦後

中島 陸雄 (県立高校教諭)

八月十五日、終戦の日である。と同時に、月遅れのお盆の日でもある。この日私は、三人の子どもたちと一緒に町へ行って一束の花と線香を買い、戦没者の慰霊塔に参拝をした。慰霊塔は、小学校の西南の、奥の木立の中に立っている。昔奉殿のあったところだ。

たろうし、私たち子どもにとつても、戦争中から引き続いた空腹の時代であった。追放後の父は、農耕生活に入つた。それまで全くやつたことのない母も、近所の人々に助けられながら、田植えから収穫までのすべてをやつた。自分で食べるものを自分で収穫するという初めての体験は、喜びでもあつたろうが、あまりにも貧しかった。小学生であつた私も、恒常的な飢えの中にいた。

父は、慰霊祭のためにモチ米を少しずつ貯めておいて、餅をついてみんなに配つた。そのために、家族は、正月の餅さえるくに食べられなかつた。またある時、祖母が老衰によつていよいよ息も絶え絶えの時に、祖母のことを母に頼んで、苦しそうな表情をしながら、モチ米の袋を背負つて、慰霊祭のために出かけてしまったことがある。とにかく、家族も何もかも犠牲にする感じで、戦没者のことにかげり回つていた時期である。何年かして、父の公職追放は解除となつた。

八月十五日に、私と子どもが慰霊塔に参拝する意味を、私は子どもたちにはつきりと話したことではない。しかし、その子どもたちが二十歳を越えた今、以前よりもむしろ積極的に参拝に出かける姿を見ていると、私の家族の、この小さな年中行事を通して、父の意志や、戦争の悲惨さ、戦死者に対する思い、激動する歴史の渦の中の自分の生き方などといったようなものを、彼らなりに少しずつ考えているのではなからうかと思つたのである。

私と子どもたちが小学校の頃から続けていることなのである。子どもたちの祖父、つまり私の父は、戦後まで、この村で村長をやつていた。大東亜戦争の最中の村長であり、しかも陸軍中尉でもあつたから、戦争に勝つためのあらゆる努力をしていた。在郷軍人会の仕事とか、本郷連隊区将校団の何とか言う類の、たくさんの肩書きを持つていた。

その後父は、自分の村長時代に戦地に送り出して戦死した人たちに對して、何かしなければという思いにかられていた。そして、一応の目標が慰霊塔の建設であり、戦没者の慰霊祭であつた。公的な一切の肩書きを失い、一介の農夫であつた父は、帰還軍人の方や、遺族会の方々と協力して、その二つの目標を達成するための努力を続けていた。

《秋晴れの心に残る乱れ雲 逝きし御霊に何と答えむ》
その日の日記に、こんな歌がメモされている。解放は嬉しいが、自由になつた喜びの裏に、あのみ勢の戦死者がいたのだ。その父が、昭和三十五年の一月に、突然病死してしまつた。日本の国土を守るために、家族を含めた日本人の生命と財

まもなく父の命日がやってくる。
一月十四日

四季の彩り

竹下 由香

希望の光にがやく新年を迎えて、皆様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。昨年中は、大変お世話になりました、厚くお礼を申し上げます。本年もなにとぞよろしくご指導下さいますようお願いいたします。

たちです。着替えながら、気持ちよさそうに眠っている二人を見て、「今朝はどうやって起こしてやろうかな」と考えます。――昨日は沢山叱つてしまつたから、今日はなるべく叱らないようにしよう――と毎朝のよ

暖冬とはいっても、いよいよ朝の寒さは厳しくなってきました。五時四〇分にセットされた目覚まし時計が、静かな朝に響きます。目をあけると辺りは真暗で、手探りで時計を探しながらスイッチを止めます。あまりの寒さと暗さで、なかなか起き上がれず、伸ばした手をまた布団の中に入れて目を閉じてしまいます。頭の中では「もっと眠りたい。」という欲求と、「起きなくては」という使命感が葛藤します。毎朝、その葛藤をやつとの思いでクリアして、私の一日が始まっているのです。

大切な一日の始まりの朝、できるだけ叱らないで、ニコニコと子どもたちと関わろうといつも思っています。「おはよう、亜季羅くん、おはよう、啓二くん」となるべくよそ行きの声で起こします。何度呼んでも起きない二人。私の声もだんだん大きく、厳しくなつて行きます。そのうち、私の声がうるさくなるのでしよう。頭から布団をかぶりま

くるまつて、いつまでもならしたまま、全く止めようとしませんと。啓二も「寒い、さむい」とグズグズ泣きだし全く起きあがろうとしません。これ以上関わつたら、大騒ぎになるだろうと思ひ、「早く着替えないとごはんになるよ」と、一声残して階下へ降りて行きます。その間に、檜山さんも「早く起きろ」と起こしに来てくれるのですが、なかなかしぶとい二人です。

で自分で起きてね。」と話しました。啓二には「いつもニコニコのお顔で起きる啓二は大好きだけど、ギャーギャー赤ちゃんみたいに泣く子とはお話できないよ。」と話しました。

はつゆめ

養護メモ 32

菅原 哲男

明けましておめでとうございます。これまでの物心両面のお支えを心から感謝申し上げます、併せて上よりの祝福が豊かにありますようお祈りいたします。

養護施設光の子どもの家は、子どもたちの子どもの施設にするために、全力を尽くすことを確認した者たちによって運営されることを願って建てられた。

額の上が少し広くなり、よい恰幅の守野匠が、光の子どもの家の経営に頭を抱えている。

人件費の確保のため県庁に電話して補助金の種類や申請の仕方などの相談を終え、深いため息を一つした。そこへ、担当保母になつてゐる小林見子が、学校の先生から、担当の子どもの指導について相談の電話がきて

「そのことについては、もう三〇年もここで子どもや職員の指導に当たつてゐる坂巻おじさんか、坂巻さんの奥さんの由香お

ばさんに相談するように言つていたではないか」と、少し怒気を含んで言つた。すると、「どうも坂巻おじさんには相談しにくくつて・・・」と見子。匠は、

先日の職員会議で「学習指導も大切だけど、子どもともつとゆつたり生活し、楽しむ時間を考えて欲しい」という見子と「じやあ子どもたちの将来はどうなるんだ。お前さんの子どもがいちばん大変なんだよ。自立のためにもつと訓練をしなければ」と意見が対立し、激論の末泣いてしまひ、竹花おばさんにも後

で「会議で泣くなんていけません！自分の感情をどうにもできないでどうするんですか！」と叱られたことなども知つてゐる匠は、しかたなく電話に出た。

気をとり直すように匠は、四年生の時から暮らした仙道家に行き、自分で濾れるのが一番美味しいと自慢しているコーヒーを濾れ、ゆつくり飲んだ。

から理科大に行きコンピュータのソフトを開発して会社を設立し、今関おじいさんが始めた北埼玉光栄教会の役員や、光の子どもの家の理事長などをしていて多忙な小林悟が見えた。

「コーヒーの腕あげたな。まだ菅原おじいちゃんには及ばないけどな」「そういえば菅原おじいちゃんにも暫く会つていないな。今度の施設長会に出たとき寄つてみるが、お前都合がつかないか」と聞かれ、悟が「そうだな、おじいちゃんも好きだつたお酒はずいぶん減つたが毒舌だけは健在だ。都合をつけて久しぶりに叱られに行くか」。

悟のお腹を見て「お前、また太つたな、九五センチはあるだろう。」と匠。すかさず悟が「お前、人のことが言えるかよ」などと言いあつた。年をとつてもお腹は変わらない今関おじいちゃんも、厳しいが好評の説教をする金曜夕礼拝の話になつた。

そこへ、事務長をしている森紅子と東大宮教会の牧師になつた高山嬢が、来年度の宗教教育について光栄教会と東大宮教会

が連携する件を相談したいとやつてきた。

大きなくしゃみで初夢から覚めた。

光の子どもの家の設立に当たつて確認したいくつかのなかに、法人や施設の世襲的相続的な継承を禁じる重要な事項がある。

設立準備の時から、施設が出来、そこで育つた子どもたちがこの施設を、人の顔色などを気にせず、運営・経営していただけるような人格に育てる夢を語り合つてきた。

☆プリズム

まなざし……

佐藤家

あけましておめでとうございます。おかげさまで、佐藤家の子どもたちも昨年一年間、大きなけがや病氣もせずにご過ごすことが出来ました。今年も、みんなで力を合わせて頑張りますので、よろしくお願い致します。

年が明けると、もう進級・進学の時期がすぐそこまで来ています。佐藤家にも来年から新しい学校へ通うことになるお友達がいいます。一人は、いよいよ中学生になる逸朗君。クリスマス前のページェントでは少し照れながらヨセフを演じました。もうひとり、小学校に上がる我家の末っ子・珠弥ちゃんです。周りにはみんな小・中学校のお兄さんお姉さんばかりということもあって、わがままで甘えん坊(嬢?)などころがあります。四月からはお姉さんの仲間入りします。ピカピカのランドセルを背負って誇らしげに学校へ歩いていく姿が、今から目に浮かびます。珠弥ちゃんといえば、昨年の終わりの頃、こんなことがありました。朝、ダイニングルームで幼稚園に行く支度をしているときに、なんの拍子にか舌を噛んでしまいました。「痛い、痛い」とあまり泣くので、照子さんが薬をつけてあげるといいましたが、苦いからと嫌がります。それでもつけてあげるからといって、照子さんはこっそり砂糖壺からお砂糖を取り出して舌の先につけてあげました。すると、さつきまで泣き顔だったのが、急にニヤツとして「もつとおくすりぬつて」とせがみます。「もうお仕舞よ」と言うと、「いいから、もつとぬつて」と言つて、キッチンから砂糖壺を持ってきました。そこにいた人たちは、みんなで顔を見合わせて思わず笑つてしまいました。

新しい一年が始まりました。来年の今ごろもみんなが笑顔でいられるよう励んでいきたいと思ひます。 坂巻 直之

☆プリズム

子どもたちの季節

仙道家

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひします。 子どもも迎えるお正月も、もう六回を数えるようになってしまいました。ここ仙道家のお正月は、ダイニングルームのこたつと共にやって来るといつても過言ではありません。

一月二十八日のもちつきが終わると、正月帰省が始まります。親や家族が迎えにきて、得意満面に手を振る子ども、剣道の越年稽古、初日の出と続けて出かけ、寝不足気味の顔で帰省する子どもと様々ですが、残る者にとつてみれば一人減り、二人減り、という情景は、やはり物悲しい思いがするものです。

「なんか、寂しいね。」と言ひながらニコツと笑う萌季ちゃん。その言葉を合図のように大人たちは、テーブルを片づけ、こたつをダイニングにしつらえます。普段は、テーブル二つに分かれてする食事、こたつ一つで用が足りるようになります。十数人でする食事もぎやかで楽しいものですが、こたつ一つを囲んでの食事もなかなか小じんまりしてよいものです。何とはなしに暖かく、のんびりした雰囲気が出てきて、お正月らしくなります。

出来るだけ多くの子どもが帰省できるように心から願ひしていますが、やはり、実際は残る子どももそこそこいるのです。その子どもたちのお正月のイメージを、そして文化を、今、私たちが伝えているのだと思うと、とても不安になります。それは、自分自身が人に伝えられるようなそんな豊かなものは持ち合わせていないからです。

それでも、私たちは光の子どもの家のお正月を創つていかなければなりません。ここを築立った子どもが、遊びに来れるような八家Vを、そしてお正月を創つていきたいと願ひます。休日や、お正月にいつも泊まりにきてくれる一青年が、その可能性を予見させます。新たな気持ちで生活をつくります。子どもたちと。 岩崎まり子

☆プリズム

原田家日記

「ジリジリジリジリ……」暗闇に鳴りひびく。襖一枚隔てて寝ている見子の目覚まし時計だ。13才の誕生日を境に、保母や幼い東姉妹と寝室を変えた。その日から一月。環境を変えて一気に自立、との願ひは、火災報知器の誤作動の夜も目覚めなかつたという見子に八目覚まし時計で起きるVという基本的課題をクリアさせなければ叶えられない。寝る前に見子は目覚まし時計を枕元に置く。ここまではいいのだが、夜中に突然鳴り出したり、時間を過ぎても静かだつたりしている。この季節の中で、保母を起す役割だけは充分果たしてくれている。

あの音が嫌い、起きなければならぬ時刻に自然に目が覚めることを自慢にしていた保母だが、まだ外が真つ暗なこの頃は難しい。朝食の準備を半分ほど整え、多歌声、福子を起す。障子を一枚開けると、ガラス戸の向こうのひんやりした外気が伝わる。ほんのちよつとガラス戸を開けるとアヒルの声が飛び込んでくる。二階からは洗面タオル片手に一人、そしてまた一人と降りてくる。この頃からの数十分が一日の最も大切なスタートの時となる。

自分のことは自分でする事、それに加えてグループの一員としての役割、長女としての手伝いなど一気に仕事が増えるこの時が、見子の朝の忙しい貴重な時間だ。十人の子どもの一人であるというより、自分たちの暮らしを創る担い手として、保母に近く位置していけるようたくさんの願ひと期待を持ってしまふ。その一方、やはり子どもとして、その成長を長いスタンスでとらえ、待たなければ、と思ひかえす。保母も見子もお互い気持ちよく生活し合うために、少しづつ力を出し合えたらと思う。そのための努力を見子よりもしているだろうか。寂しい思いを重ねてきた経験も、たくさん手伝う忙しさも、そして家族と共に住めないことさえ、すべてバネにして一日のスタートを切る。そんな朝にしていこう。 竹花 信恵

子どもたちのかがやきとともに

光の子どもの家後援会から

明けましておめでとうございます。この六名に一名は、二四時間通して置かなければなりません。措置費などの公的に保障される費用は、学童六名に指導員あるいは保母が一名の算定により、この六名を持った職員の交代要員はおりません。便りでは「二四時間勤務を前提に」になりました。むしろ二四時間三六五日勤務が八前提Vにさえなりません。ところで、人道的にも、労働法規上もそれは許されません。

週休と国民の祝祭日、最低限の有給休暇、冠婚葬祭などの特別休暇などを含めると年間の二〇%、七五日以上の休日があり、夜は宿直などの定めはありますが、公的、私的、つき合いや、生活に不可欠な様々な集まり、全体的な活動などで、指導員、保母全員が担当を持てません。子どもを担当する「指導員、保母一名が十名前後の子どもの持つ」こととなります。特に担当職員が休むと、子どもが我慢しなければなりません。子どもの我慢で職員の休みを保障してい

るともいえます。以上が、最低基準による公的保障だけで運営する一般的な民間の養護施設の状況であると考えられます。

ご理解頂きたかったのは、私たちは、そのような状況の中で、言葉の正しい意味で「子どものための子どもの施設」にしたいと、ギリギリ頑張っている光の子どもの家のあり方への賛同、ご支援を願ったもので行政や他の働きを非難しようなどの意図は全くありません。

都道府県などの中には独自の制度や手厚い施策もあり、埼玉県当局も様々な補助、県単独の事業を策定して、最低基準を補い、子どもの福祉を保障する努力を展開して頂いております。

措置費を遣いきれず厚生省の通達で剰余金を処理し、厚生省令の最低基準の達成を努力目標にしてしまつては、全く制度などのなかつた時代に、民間社会事業を先駆的に独力で切り拓き、社会に警鐘を打ち続けてきた我々の先達に申し訳ありません。光の子どもの家の働きがいつもその思いを共有できるよう励ましていきたいと願うものです。

日誌抄

十一月一日
十一月三十日

十一月三日 第二十四回理事会を開催。今年度の第一回の補正予算案の審議、承認。

○第六回感謝の集い挙行。晴れ渡った暖かな一日、お世話になつていらっしゃる皆さんや関係者など一八〇名が集い、感謝礼拝と祝会を。不動岡高校のバンド「whips」が勇ましくハードロックを響かせ、アルトサクスの飯田さんご夫妻のロマンティックな調べに酔い、最後は勇壮な武威暴れ太鼓に身も心も震える。ありがとう、また来年会いましょう。

四日 小学校、日頃学校にはあまり縁のないお父さん方を対象にした日曜参観。先生方も少し普段とは違い、柔らかな雰囲気。

五日 第一回のクリスマス委員会。役割分担や子どもたちへ何を伝えるかなどを確認。

十一日 東大宮教会で八名が幼児祝福式を。主の祝福と導きを祈り、豊かな生涯を願う。

○北海道美深育成園へ菅原が。

反射光

暖かな六度目の新年をみんなを迎えることができた。

自立援助ホームなど児童福祉の限界に挑戦する、鳥取子ども学園の藤野、聖盞愛児園の安川、青少年福祉センターの込山、ホスト役の木下の各先生と施設交流会の協議。お世話になり刺激された三日間。

十九日 江森ヘヤーサロンのご主人。いつものご奉仕。感謝。

二〇日 真の児童福祉を追究してやまない同仁学院の関根施設長を始め七名の職員が学習会に来訪。真剣に熱心に。

二一日 中学校部活動参観。剣道部、家庭部をそれぞれらしく。

二三日 青山学院大学ACFより一九名来訪。土運び、子どもと遊び。同大学名誉教授佐藤信理事と佐藤家の名の由来などに感慨深気。感謝。

二五日 北本市の清水氏よりキーウィフルーツを。感謝。

二七日 恒例の剣友会と有志のそば会。針谷氏の腕が冴え、新鮮なお魚をみんな。創設時の労苦を忘れるなども。

明けましておめでとうございませう。この年も子どもの暮らしを豊かに、励みます。(くら)

況が続いてきました☆今度こそもうダメかな、職員の補充の可否、取り組みの水準の維持、向上などなど☆しかし、必要な分だけはキツチリ与えられてきました☆皆様の熱いご支援に胸撃たれる思いと新たな決意も同時に☆そして私たちを超えた入意志Vさえ実感させて☆昨年は人々の願いが直接的に東西の緊張を破る世界的規模での激動がありました。また、国や人の裡にある醜さも世界的規模で露呈し、しかも、それらが人々の生活を直撃しました☆これから二一世紀に向けて世界的視野と、世界に通用する知識や技術などの教養を持たなければならぬことを実感させられました☆そんな時代を担う子どもたちの養育を、考えただけでもダメです、逃げ出したくありません。☆でも、主よ、こんな私たちでもお入り用ならばどうぞ！この年も☆乞う、ご支援を！(哲)